

平成22年度組織的な大学院教育改革推進プログラム

「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」

「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

I. 自主企画の内容

(1) 企画の名称

「生きる力」の教育は可能か？—現場のプロフェッショナルに学ぶ—

(2) 開催日時・会場

2010年12月6日(月) 16:30~18:30 文学部北棟N202教室

(3) 講演者

山本 光平 (株式会社テルミーソリューションズ)

美容院の顧客管理システムの開発。「毛髪による乳がん早期発見システム」を独立法人 SPring-8 (大型放射光施設) と共同して構築し、全国 22 万軒ある美容院で実現できるよう国と折衝中。北千里駅前商店街「dios 地域研究交流会」を共同運営。

市橋 正己 (摂津市教育委員会事務局 教育総務部)

小学校校長在任中、山本光平氏と共に、学校と地域を結ぶ取り組み「未来のクリエイター支援プロジェクト」を実施。小学生たちが地域社会にフィールドワークして学び、交換による経済活動を実際に行って自ら地域社会を構築するという取り組みであった。

(4) 企画者

持塚 直子 (人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

堀 文音 (人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

小鹿 裕美 (人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

村田 紀子 (人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

國則 友里 (人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻人間関係行動学コース)

(5) 支援教員

天ヶ瀬 正博 (文学部人間行動科学科准教授)

(6) 参加人数

35名 (内訳: [学内] 教職員2名, 大学院生7名, 学部学生・研究生14名, [学外] 12名)

(7) 自主企画概要

学校での学びがどうすれば「生きる力」になるのか。「生きる力」とは何か。講師に、学校と地域そして学校と生活を結ぶ草の根の活動に取り組んでおられる方々をお招きし、学校の内と外を問わず、多様な視点での討論を試みた。講演に先立ち、企画者がインタビューした小学生から高齢者まで様々な職業・身分の130人の人たちが考えた「生きる力」を会場に展示し紹介した。それを受けて講演が始まり、参加者を巻き込んだ討論へと展開した。学部1回生から社会人やお母さん方も含めて33人の参加があり、大学内とは異なる視座からの意見も共有できた。山本氏の「自己実現と社会実現をデザインする」生き方に迫力を感じ、市橋氏の「地域に共に生きつつも背中合わせでいる人同士が互いにちょっと振り向いてみる」という温かいことばに、感銘を受けた。

【参考】新学習指導要領が小学校で2011年度、中学校で12年度から全面实施される。その内容の中核として、ゆとり教育でも詰め込み教育でもなく、「生きる力」をよりいっそう育む教育という方針が示されている。文部科学省が「生きる力」を提唱したのは1996年であった。2000年からは「生きる力」をつけることを目的とした総合的な学習も始まり、教科などの枠を超えた、横断的・総合的な学習が試みられてきた。しかしながら、実際の総合的な学習の時間では、いくつかの教科を組み合わせただけというような授業が多く見られた。このため、「生きる力」を育むという目標が達成されるような学習となっているのか、疑問の声が上がっている。2006年には国際学習到達度調査（PISA）の結果などから高校生の学力低下が社会問題となり、「生きる力」の習得を目指した総合的な学習の時間の存在意義が厳しく問われた。「生きる力」の教育は未だに模索の段階であると言える。

II. 実施報告

1. セミナー内容

1.1 事前インタビュー報告～100人に聞きました！あなたの「生きる力」とは？～

企画者が事前に様々な方に、「あなたの『生きる力』とは何ですか？」という問いを投げかけ、それぞれ紙に書いてもらったものを会場内に展示した。講演に先立ち、それらを企画者が紹介した。小学生から高齢者まで延べ130名分の「生きる力」があり、それらはまさに百人百様であった。身体に関わるもの（「しんぞう」「健康」「睡眠」など）から、自分の内側から突き動かされるもの（「夢」「希望」「好奇心」など）、周囲の人（「家族」「友人」「子ども」など）まで、多くの「生きる力」があった。

1.2 山本光平氏と市橋正己氏の講演（要旨）

まず「生きる力」を教育すること自体に疑問がある。浜田寿美男氏によれば、「生きるチカラ」というのは「学校という文化」に特有の語り口であり、社会に出て行く準備を学校ですするという子育て観が前提となっている。しかし、それは「畳の上の水練」のように思えるという。

たいせつなことは「たったいま人どうしの共同の生活を生活者として十分に生きているのかどうか」であると浜田氏は指摘している。その本来的なあり方を7歳、12歳、15歳とたどると、7歳までにおいては、「生きるカタチの基礎・基本」として、身の回りの人たちとともに暮らし、おのずと歩くように

なり、喋るようになり、自分の手で食べるようになり、排泄を自律させるようになる。周囲のおとなたちが作りだす暮らしのカタチに型取られて、おのずと生きるカタチが生み出されていく。それから 12 歳までにおいては、「自分のチカラが生きる生活」として、学校で学ぶということが、周囲のおとなたちが作り出す暮らしのカタチに型取られた生きるカタチの一コマとなり、点数や成績順位とは別に、学ぶこと自体が楽しくなる。家庭では、食事や掃除などを分担して、自分が何かをして相手に喜んでもらう、あるいは、生産者であることの喜びを感じるという人間のもっとも基本的な「生きるカタチ」が生み出されていく。15 歳になれば、「世の中の人々の生きるカタチを知る」。公の世界を見つめて、そのなかに自分を位置づけて考える。このように子どもたちが生きていくことが本来のあり方であり、「生きるチカラ」は多様な人々がともに生きるというカタチがあってはじめて生まれてくるのだと、浜田氏は書いている。



浜田氏の指摘すること（カタチ）がフィギュア・スケートという規定演技であるとして、では、自己実現に向かうために 15 歳以後にどのようなフリースタイル演技があるのか。大河ドラマで話題の坂本龍馬を例に挙げると、彼の志はいつどこでどのようにして生まれたのか。このような問いも立ててみたい。

日本では学校と職業・社会の間に「学力の不連続」「人との不連続」がある。アメリカでは中高でほとんどの生徒がアルバイトをしてお金を稼ぐ。学校以外の場所で生きることをする。日本の大学生は、それまでに現実の社会を十分に体験することなしに、21 歳で一生の仕事を決めなければならなくなる。大学に入るテクニックはあっても、それだけでは生きられないのが社会の現実。社会で生きるには何をどのようにすればよいのか。大学までの教育でこのことが身につけていない。「学力の不連続」である。また、別の点で言うと、日本では学校と社会において「人との不連続」もある。いま学校で起っているとされる問題はほとんどが本来は学校だけでなく家庭や地域や社会とともに解決していく問題。学校だけでは解決できないのに、学校だけに解決が求められるから、解決できずに問題となる。例えば、運動会などの屋外行事でスピーカを使うと、すぐに苦情の電話が入る。これは学校と地域が互いに歩み寄って理解し合って解決する問題。学校現場にいと、互いに歩み寄って理解しようとしていない人が増えているように感じる。

ビジネスで求められているのは「オレとオマエが組んだら何ができるか」ということ。社会も同じで、自分だけでできないことは、みんなと一緒にやろう、力を借りようとするのが重要。どうネットワークをつくり、どれだけコミュニケーションをとってやっていくか。例えば、聾の高校生のためのノートテイカーが大阪府の事業仕分けで廃止されたとき、聾の生徒が在籍している高校の校長が私たちの運営する街づくりの集まりにボランティア募集を依頼してきた。街づくりの会から地域に呼びかけると、ボランティアで 3 名の人たちがノートテイカーに名乗り出た。そうして、聾の生徒は高校を卒業でき志望大学へも入学を果たした。また、例えば、いま現在、全国 22 万ある美容院と独立行政法人の大型放射光施設 SPring-8 を結ぶという取り組みを行っている。マンモグラフィによる乳がん検診では、身体

的かつ精神的な苦痛のために受診者が増えない。精度の問題もあり、誤って乳がんと診断されて身体的・精神的苦痛をさらに強いられる場合もある。毛髪を SPring-8 にかけて検診すると、それらの問題はなくなる。しかも、美容院も SPring-8 も新たな社会的役割を得ることができる。

ビジネスでも社会でも人と人とのつながりをつくる時、スポーツや芸術や趣味や素養が重要となることがある。特に、西洋社会でははっきりしている。例えば、パーティでピアノを演奏したり社交ダンスを踊ったりすることで特定の集まりに受け入れてもらいやすくなることがある。それに対して、日本では、大学受験に関係ない音楽、体育、美術をなくしてくれという PTA までもいる。

つながりをつくるということにも加えて、社会が向かうべき目標を見つけ問題を探り出す感性を磨き、そして、解決する方策を創り出すにはリベラル・アーツが必要となる。地域や社会のあり方、そして歴史や古典や文化遺産についてのリベラル・アーツが。例えば、奈良にある文化遺産には、民衆を幸せにしようとする「仕掛け」がたくさん組み込んである。社会をつくるための「デザイン」や「仕掛け」を見抜こうとする視点をもって奈良を歩いてみるのが、リベラル・アーツであり、感性を磨くことにつながる。

浜田氏の言う 15 歳までの生きるカタチがフィギュア・スケートの規定演技にたとえられるとすると、フリースタイルの演技の段階では、「自己実現」に加えて、いわば「社会実現」を目指すことになっていく。ここで大事なことは、人のために役に立って、初めて自分の利益になるという順番。坂本龍馬が志をもった時、脱藩して広い世界を知り、西郷隆盛や高杉晋作やいろんな人に出会って、いろんな力を借りながら、新しい時代の社会実現に向かった。坂本龍馬の「生きた」証に、リベラル・アーツで感性を磨くこととコミュニティの不可欠さを見出すことができる。

1.3 講演者たちと参加者たちのやりとり

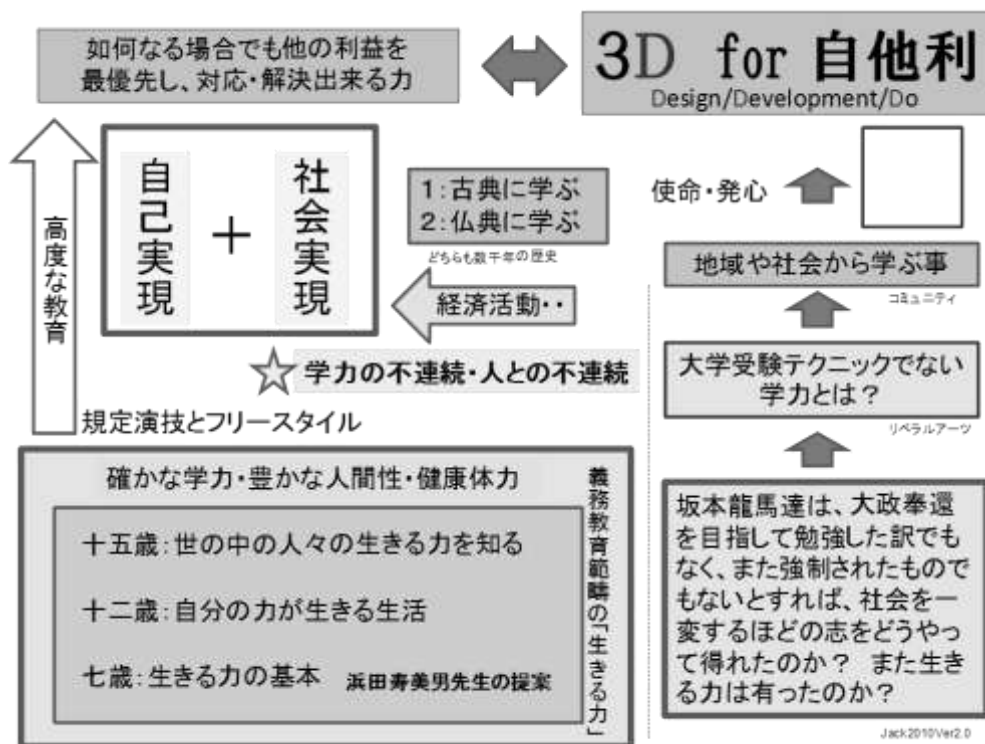
講演中、事前に参加者が書いた「生きる力」の中からいくつかを山本氏がピックアップし、その考えが紹介された。「ラブ」、「死ぬことを恐れること」、「自由を楽しむこと」、「美術館、読書、映画」、「つながり」、「認める」、「自己実現と社会実現」といった意見があり、「生きる力」の多様さを参加者で共有した。そこには「個」としての「生きる力」から社会との関わりにおける「生きる力」までが考えられていた。「つながり」、「自己実現と社会実現」という言葉にある通り、個と社会の統合的な視点の提案があった。

1.4 最後に山本氏と市橋氏からのメッセージ

最後に、山本氏からは“3D for 自他利”というひとつの提言（資料1参照）があった。3DのDはDesign、Development、Doの3つから。自他利というのは、自分と周りの他の人を幸せにするということ。自己実現と社会実現のことである。如何なる場合でも他の利益を最優先し、対応・解決できる力がこの“3D for 自他利”に繋がるのではないかと山本氏は考える。そしてそれを培うには、高度な教育と同時に、大学受験テクニックでない学力、それは地域や社会の中から学ぶ事柄なのではないかという。

市橋氏は「つながり」がひとつのキーワードであるという。学力調査の結果が高い都道府県を調べると、特別なことは何もしていない。ただ、3世代、4世代で一緒に暮らしている、つまり子どもたちをみんなで見ている家庭が多いということがわかっている。教育委員会には「どこに相談したらいいかわからない」という相談がよく寄せられる。これだけ新聞もテレビもネットも発達している世の中で、この相談が出てくるという現実。世の中背中合わせに生きていると市橋氏はいう。その世の中背中合わせに生きている人同士がちょっと振り向く勇気、機会、知恵が「生きる力」のヒントではないかと話された。

資料1：山本光平氏の提言



2. 総括

まず、参加者数については、全参加者数が35名で、当初の見込みよりも少なかったが、学部学生からの14名の参加が得られ、またさらに、学外の企業・団体から8名の参加を得られた。大学院生だけでなく、学部学生、さらには、企業・団体の方たちが大学において社会的課題を共有し討論できたことは大きな成果であった。また、同様に、アンケートへの回答ではあったが、大学から問いを發した社会的課題について、小学生から高齢者までの130人程度の人々が共有し考え間接的にセミナーに参加したことも大きな成果だと考える。

講演は、昨年度まで本学教授であった浜田寿美男氏による「生きる力」教育への批判を紹介し、それを踏まえることでなされた。これは講演者独自の判断と準備によるものであり、本学での研究と教育について学外者に理解していただいた機会になったと同時に、予想以上に高度な学術的水準を講演において確保することとなった。浜田氏の批判の眼目は、「生きる力」は学校で教えることではなく、多様な人々

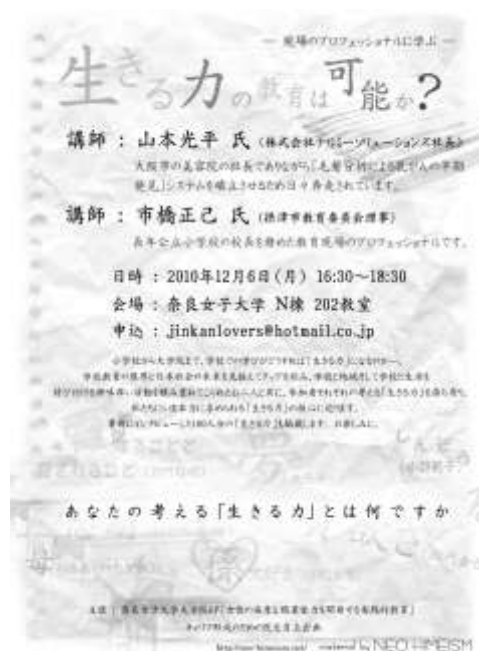
が生きる場においてその生きる場のカタチにしたがって子どもたちが自ら生きるカタチを整えて生活しやがては役割を担いその喜びを感じることにあるということであった。そして、このように浜田氏が義務教育レベルで論じたことを大学や大学卒業後まで敷衍して、講演者自身の実体験と現在の活動を交えながら講演がなされた。講演では、社会的ネットワークの形成の重要性、人と人とのつながりをつくることにおけるリベラル・アーツの重要性、そして、新しい社会を志向しデザインすることにおけるリベラル・アーツの重要性が実体験から指摘され、最後に、いわば「社会実現」と自己実現の相即性が説かれた。実際に草の根から社会を変革する実践を行っている講演者からの実体験に基づいたメッセージは、説得力があり、単に社会的課題の共有という以上に、参加者一人ひとりに社会の一員としての責任を自覚させ、行動を鼓舞するものであった。

以上の通り、多様な参加者の確保、大学院生企画に見合った学術水準の維持、そして、キャリア形成という目的において、十分に成果が得られたと判断している。ただし、企画の構成自体には、いくつか反省点が残った。特に、企画の内容が事前にうまく広報できなかった点、当日の進行において講師と参加者との討論の時間が不十分であった点が挙げられる。また、当日までに 130 人にインタビューした、「あなたの考える「生きる力」とは？」を内容毎にカテゴライズし、まとめ、展示したものの、それをうまく生かす工夫が足りなかった。次回に繋げたい。

3. 結びにかえて

学校での学びがどうすれば「生きる力」になるのか。「生きる力」とは何か。この企画は、教職を目指す私たちのそんな素朴な疑問から始まった。この企画をまず山本光平氏にお話したとき、山本氏から「今現在、あなたたちの考える『生きる力』とはどのようなものか？」と問われた。私たちは、答えに窮した。周りの方々は「生きる力」をどのように考えているのだろうか。「あなたの「生きる力」とは何ですか？」この問いを携えていろいろな方々に出会い、対話を重ねることで、自分たちなりの「生きる力」を探した。さまざまな「生きるカタチ」に触れ、その人なりの「生きる力」を聞く中で、私たちは何とか今の自分が考える「生きる力」、「社会の中で自分を生かす力」と「生まれてきたことと生かされていること」を見つけ出し、講演を迎えた。

山本氏の「自他利」という言葉。自分が何かをして相手に喜んでもらうと自分も嬉しいというのは、誰もが持っている素朴な感情だ。「如何なる場合でも他の利益を最優先し、対応・解決出来る力」が「3D for 自他利」には必要だと山本氏は言う。しかしながら、「如何なる場合でも他の利益を最優先」することが、他者のみならず自分の幸せにつながるということは、誰もが理解し、実践できている事柄なのだろうか？そして教師として、母親として、大人として、子どもたちにどう伝えられるのだろうか？



人と接する機会をたくさん持つこと、すなわち多くの「つながり」を感じながら生きることが必要ではないだろうか。子ども時代にたくさんの人と関わり、人を幸せにする喜びをたくさん味わうこと。例えば、家で家族のためにご飯をつくることでもいい。まず、誰かのために自分の力が生きる生活であること、自分も誰かの役に立っている、自分も誰かを「生かしている」という実感を持てる生活であることが、「自他利」に気がつくことには大切なのである。この、自分も誰かを「生かしている」という実感が得られて初めて、自分も周りによって「生かされていること」にも気がつけるのではないだろうか。「生かされている」ことを感じられたら、おのずと、自分も他人も大切にできるようになる。

さらに、そういった「つながり」の中での生活でこそ、わたしにはこんなことができる、こんなことが得意という発見が生まれるのではないだろうか。そうして何かに強い興味をもって、自ら主体的に行動していく中で、自分の夢や希望を見出していくことができる。いわゆる「将来」のための机上の勉強だけをしていたのでは、自分のやりたいことや夢は見えてこないだろう。「つながり」の中で経験すること、世の中の人々の生きるカタチを知り、社会の中の自分の立ち位置を知ること。それこそが社会の中で自分を生かす力、 $1 + 1 > 2$ （1人と1人が合わさると2人以上の力を発揮する仕掛け）をデザインする力、そして自他利に結びついていくのである。

「生きる力」は学校だけでは教えられない。そして一朝一夕で身につくものでもない。今、私たちが生きているこの場所、この時間、身近な人々との関係を見つめて、丁寧に生きてみる。そんな一見当たり前に思えることから、すべては始まっているのではないだろうか。

この企画を通して、事前インタビューに応じてくださった方々を含め、普段は顔を合わせることもない異なる立場の方々がつながり、答えが1つでないものに向かって真剣に考え、意見を交わし合えたことに大きな喜びを感じている。快く講演を引き受けてくださった山本氏・市橋氏、支援してくださった天ヶ瀬先生、そして本企画に協力してくださった全ての方々に心から感謝を申し上げたい。

（文責：堀 文音・持塚 直子）



回答者：21名

※ 紙面の関係上、問いに対する回答のいくつかを抜粋し、報告する。

<p>Q1.あなたの考える「生きる力」とは？</p> <p>ラブ／人とのかかわり／つながり／希望・理想・夢・ごはん・小さな幸せ／人を含めた全ての環境／いかに人につながっていくかを考え、行動していくこと／自分で工夫してアイデアを生み出す／前を向いて進むこと／自己実現と家族／全ての人と積極的に関わっていかこうとする努力／“教えるもの”ではないと思う。“身につけさせる”手伝いをするのが大人の役割／目的をもつこと／自己実現と社会実現／愛</p>
<p>Q2.この企画を100点満点で評価すると？</p> <p>平均点： 92.5点</p>
<p>Q3.山本光平氏と市橋正己氏に一言</p> <p>1回生で始めは不安だったのですが、19才でこの講演に参加できてよかったなあと思います。／将来母親になる身として、また一人のビジネスパーソンとして非常に考えさせられる内容でした。もっと広い視野をもち、「デザイン」をしていける人間になりたいです。／めっちゃ熱いおっさんに会えてよかったです！！若者も負けてられない！！／生きる力そっちのけで仕事の話じっくり聞いてみたいと思いました。／山本さんの人生談をもっともっと聞いてみたいと思いました。楽しかったです。市橋さんのお考えももっと聞きたいので、もっとたくさん話してほしかったです。</p>
<p>Q4.今日気になった言葉は？</p> <p>「認める」です。認めること、許すこともラブに含まれると思う。／つながり／3D for 自他利／ネットワーク／背中あわせに生きているのをちょっとふりむいて生きてみる／大学のテクニックだけでは生き続けられない／大学出たあとのデザインを！／ラブ／今から50年後のデザインをしていかないといけない。／生きる力／乳ガン</p>
<p>Q5.今日の話伝えたい人はだれ？—特に伝えたい内容は？</p> <p>父 地域のために奔走している父に「つながり」の話を。／中学1年生の弟に。なるべくわかりやすい言葉で伝えなければならないが。／教員志望の仲間 生きる力の教育がうそくさいと言っていた子へ、うそくさい＝教育だけではムリがあるからこそ、しかけ作りをする情熱を持つことが大事だと言いたい。／大事なひとたち、友人、少し離れている友人に“あなたがいて私も生きてるんだよ！”と伝えたい。／友達 これから就活で悩んでいる子がたくさんいるので、「生きる力」について話をしてみたい。／小さな子どもを持つ親に、子どものうちにいろんなことを経験させて、いろんな人とコミュニケーションをとらせなければならないことを伝えたい。</p>
<p>Q6.参加のきっかけ(複数回答可)</p> <p>ポスターを見て：1名／友人からの誘い：8名／授業での宣伝を聞いて：7名／企画者からの誘い：7名／その他：1名</p>
<p>Q7.次回もこのような企画があったら参加したいですか？</p> <p>yes：20名 無記入：1名</p>
<p>Q8.事前広報として、どうしたら参加したくなりますか？</p> <p>直接宣伝していただけると参加しやすいと思う。雰囲気も伝えたり…／もう少し具体的に何をするか教えてくれたら良かった。／気軽に来れる感じをもっとアピールしたら参加しやすい。／ポスターにはインパクトが大切。／企画に参加した人などの感想をピラとかに加えてみる。／難しいけれど…土曜日の午前中とかなら、母親たちも出て来やすいと思う。</p>
<p>Q9.企画全体に関して、もっとこうしたら良くなるのに…と思うことがあったら教えてください。</p> <p>もっとたくさんの人を呼んで聴いてほしい。／もっと人が集まってもっと討論することができたら素晴らしい。／やはり院生の方の準備不足が気になった。／参加者の方々が自分の考えを言ったり、意見交換しあうような場面をもっとあったらさらに良いと思った。(事前アンケートの結果を分析してももっと活用できたかもしれない)次は学生さん自身で途中部分も進行したりワークショップ的にしてファシリテーションをしても良いかも。／もう少し現場のお話もききたかった。／中3の息子は、最初「行きたい！」と言っていました、女子大に行くということがやはりどうしてもできなくなったよう。一緒に聞かせてやりたかった。／もう少し直接話す機会があるとそれぞれがよく考えるし、緊張感もあるし、おもしろいと思う！</p>

